

大沼法竜著

宗祖七百回忌記念

隨想錄

敬行寺發行

目

次

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	二門の盛衰
加茂の河原に										一	三
信仰の評論（一）										七	四
信仰の評論（二）										三	五
信仰の評論（三）										六	五
庄松や清九郎										八	七
無				上						三	三
自由の天地				三						三	三
唯除五逆誹謗正法				元						元	元
唯念佛して				三						三	三
慶べないか慶べるか				元						元	元

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	露塵程も
無											一念の信
											望
											晴れて満足出來たか
											究
											五
											六
											七
											八
											九
											十
											十一
											十二
											十三
											十四
											十五
											十六
											十七
											十八
											十九
											二十
											二十一
											二十二

36	35	34	33	31	30	29	28	27	26	25	24	23	難と易	難行難修自力の心	各行
万	歳	一〇三	一一〇	一二〇	一二四	一二七	一二九	一三〇	一三一	一三二	一三三	一三五	崩して廻る	崩して廻る	各行
真似では通れぬ	權化か実凡か	一一四	一一七	一二〇	一二八	一二九	なき聲	なき聲	各行						
權化か実凡か	素直な柄か	一一四	一一七	一二〇	一二八	一二九	俺は博士だ	俺は博士だ	各行						
素直な柄か	邪見嬌慢の惡衆生	一二八	一二九	眞仮の分齋	眞仮の分齋	各行									
邪見嬌慢の惡衆生	はいの返事も向うから	一二九	化土往生	化土往生	各行										
はいの返事も向うから	逆説の屍とは誰か	一二九	教線に立つ人人よ	教線に立つ人人よ	各行										
逆説の屍とは誰か	肩が凝る	一二九	思いの儘になる	思いの儘になる	各行										
肩が凝る	第十八願文と招喚の文	一二九	機をぬきにした法	機をぬきにした法	各行										
第十八願文と招喚の文	六度万行	一二九	聞かぬ機	聞かぬ機	各行										
六度万行	僧侶よ	一二九	機をぬきにした法	機をぬきにした法	各行										
僧侶よ	往生の正因でない	一二九	一念の信	一念の信	各行										
往生の正因でない		一二九	専難の執心	専難の執心	各行										

はしがき

一本の線を引いて長いか短いかと言つた処で誰も長いとも短いとも答え切れない。それは比較する物によつて長くもなれば短くも成るからである。昔或國の王様が群臣を集めて一本の線を引き、紙を折らずに消さずに短くせよと言われた時、一人の智者が王様我國の産業が他の國より劣つて居たら如何致しましよう。それは精選して輸出したらよい。他の國より兵士が弱かつたら如何致しましようか。それはうんと練兵して強兵にすればよい。それならと言つて王様の線の側に長い線を引いた。すると王様の線は紙を折らずに消さずに短くする事が出来たのだが、淨土真宗も唯ぞ～と言つて居る時は唯のようにあるけれども、唯を向うに眺めて居る唯と、唯に成ろうとあせる時の唯と、唯と言う言葉も知らない唯であつたと満足した時の唯とは、唯の様子が違うのであるから、八万の法藏を読み破つた唯まで進んで戴かなくてはならない。

信仰の書物だから成るべく角のない、有難い流暢な言葉で書こうと思つて居るけれども、愈々の切れ味に成つて來ると、文語も口語もない、「これが判らないかい、馬鹿者」と言う調子になつて大聲出さずには居られなくなるので、不遜り言葉を使つたり、有難がつて居らるるのに爆弾を投げ付けるような舌刀を浴びせて済まないとは思いますが、御寛容下さい。若し優しいのが御好きでしたら「歡喜の泉」を御読み下さい。